

水問題総特集

納得できますか？ 今年10月20日よりダム水に!?

昨年末の鶴岡水道住民投票実現のための署名活動。とにかく精一杯活動させていただきました。本当に心温まるご声援をいただき署名が1万を越えた際は、さすがに涙しました。本当にありがとうございます。

今回の運動で私たちが目指していたことは、まずは住民投票を実現させ、住民の意思を踏まえた上で、徹底した議論をおこない、広域水道に対処する「鶴岡モデル」をつくりたいという事でした。1万2千735名。市民の16%という数は決して少なくありません。しかしながら12月の一般質問、住民投票条例案の質疑、議論はひどいものでした。

市長はまず一般質問で、「80%のサイレントマジョリティはダムを求めている」かのような発言をし、「行政の長としての責任がある」と述べました。市長は、市民の長のはずです。そして、条例案の提案の際は「うまい話にのせられてる」「反社会的」などという言葉が飛びました。質疑では、「地下水が減少している」と何の調査もおこなわずに言い切る当局の不誠実な態度。そして、あぐくの果てに、砂丘地の地下水の亜硝酸態窒素濃度の上昇をとりあげ、「だから地下水に頼るのは危険」と、支離滅裂な地下水批判をする態度にはあきれました。また、10年、20年後の責任をとれるのかという問いかけには「行政は単年度主義で戦っている」とか「庄内の広域水道は全国の問題とは違う」「清酒もダム水で十分つくれる」と市長は答え、質問逃れを指摘しているとは異例の「発言停止宣告」をされ、討論を遮られました。

も住民投票賛成の立場で討論。しかし、平成クラブも、政友公明クラブも、社民党市民連合も、「20年前に決まったことをいままさら」論を展開、まさに過去だけ向いて未来に責任をもたない、本質を避けた議論に終始しました。

私は、こうした議会こそ、変えなければいけないと思いました。そして、これらの質疑内容は即座にホームページに掲載しましたが「議論じゃないね」「程度低いね」「民主主義はどこに?」とたくさんメールをいただきました。

その後も、県知事選候補者への公開質問状、そして、県企業局への質問状などの提出、県議会へのアプローチを行いました。県議会で結局、給水料金が確定してしまいました。今後、庄内地域全域で地下水からダム水に変わることへの水質の問題、水道料金負担の問題が指摘されているにもかかわらず、県議会ではほとんど議論にならなかったようです。

あまりにも無責任としか思えません。

問題を棚にあげたまま、直接料金に関係する鶴岡の受水量を決める協定は、まさに市長が議会にも一切はからずに秘密裏に決定しました。当初から民主的手続きを怠ってきたこの事業は問題の指摘を排除したまま、最後まで市民不在のまますすめられたのです。現在、最終的な料金を決める料金協議会がおこなわれていますが、その前に、根本的な疑問や、問題点を解決する必要があるはずですが、十分な説明責任が果たされず「受益者負担」の名目で政策の失敗の尻ぬぐいを水道料金で市民が課せられるのは言語道断です。

未だに残る問題は主に3点。

1.「広域水道事業」は全国で水道料金高騰をひきおこし、財政破綻をきたす、大きな問題を抱えています。鶴岡は、うまくいかない典型例と研究者は指摘しています。

2.今や、世界的に貴重さが認められ、東北随一の量を誇る地下水資源である鶴岡の地下水を放棄することなく、どのように保全し、有効活用していくのか。

いいげんにして！ 地下水管理の無策 がひきおこした 1月の断水事件

鶴岡の1月の断水はまさに地下水管理と井戸管理の無策が原因であり、政治責任が問われる重大な事件であると私は確信しています。これを「地下水不足」だけを理由に広報した当局の姿勢にはほとほとあきれかえります。

火葬場の消雪井戸を転用して回復したのは、地下水よりもむしろ井戸の問題だったことを表しています。また異常低温注意報、マイナス10度を超えても予防広報もしない、と平成8年の断水で作成した広報マニュアルも活かされず、平成5年までは、24時間監視していた井戸の取水水位、取水量は、現状では、水位計の故障などにより、科学的な計測ができず、井戸水位、水量の予測をおこなうこと

は不可能。それに、工業団地の水（中央工業団地のみで1日約1トン）消雪水（県道、市道だけで1日約3万トン）と冬季地下水が大量に使われていることや、補給量を考慮した「水収支」の把握や対策が皆無です。つまり、地下水利用の水道事業体があたりまえに行っていることが完全に欠落しているのです。

また、今回の断水は、昨年10月から4万トンもの梵字川の水を湛水していた月山ダムの試験湛水も影響していると研究者が指摘しています。

いの中の糧であるライフラインを操作して、ダム移行を押し進めるとしたら、まさにとんでもないことです。

3月議会では市民生活に多大な影響を与えながらこれに対処する方策が予算に全くとられていない事を指摘。1、全井戸の揚水試験をおこなう事。2、鶴岡全域の水収支の調査、把握をおこなう事。3、市民の信頼を回復するために絶対必要。ただちに行うことを強く求めました。早急な地下水保全条例も必要と考えています。

3.先日、田中長野知事が「脱ダム宣言」として、「コンクリートのダムは、看過（かんか）し得ぬ負荷を地球環境へと与えてしまう。更には何れ（いづれ）造り替えねばならず、その間に夥（おびただ）しい分量の堆砂（たいさ）を、此又（こゝろまた）数十億円を用いて処理する事態も生じる」と指摘。実際月山ダムも維持費が年間5億円と聞いていますし、堆砂したら浚渫費用とそれどころでなく、それはいづれも水道料金にかかってきます。また、ダム湖で富栄養化した水は河川を汚染し、内水面、海洋環境への影響も大いに考えられます。

鶴岡の水が変わる。この水は、何か。私たちの町、鶴岡は、そもそも、大宝寺と呼ばれ、赤川は、江戸時代まで大梵字川と呼ばれていたからです。その川があり地下水があつたからおかげで、鶴岡は誕生したのです。この風土の原点を失いつつあるようで、私はおそれを抱いています。この2年間、水道問題のジャーナリスト、保屋野初子氏や、公共事業の五十嵐敬喜先生らと組み、危機や問題点を

指摘してきましたが、議会や当局が今のような態度ではらちがあきません。

これまで地下水使用の水道事業体として、熊本市、神奈川県秦野市、座間市、福井県大野市、秋田県六郷町、東京都昭島市などを訪れました。神奈川県は宮が瀬ダムの問題がありますが、秦野も座間もともに、市民の要望をうけ、今ある地下水を100%のこして、足りない分をダムから引く計画です。これらの都市では総じて、地下水の良質さ、貴重さをアピールして町の魅力としてとらえています。「農を守って水を守る」策。人工涵養田など様々な保全策がおこなわれています。恩恵をうけてきた地下水を鶴岡ほど粗末にしているところはありません。

まぎれもない、貴重な資源である地下水の水道水を失うことは、鶴岡にとって大きな損失です。そしてダムは今や負の遺産になりつつあります。10月20日、本当に切り替えていいのでしょうか。みなさんの声をお寄せください。メール、手紙、お待ちしております。率直な声を集めたいと思います。